

第14回「泉大津オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（佳作）】

春一番

高島 緑・香川県高松市

所用で神戸に出かけた折、ふと昔住んでいた下宿屋が見たくなり、足を延ばして西宮市に向かった。

昭和四十九年から二年間暮らした下宿屋は阪神電車鳴尾駅のすぐそばにあった。駅前に車を止め、遠い記憶を辿りながらそのあたりを歩いて捜してみるが、街はもうすっかり様変わりし、下宿屋だった建物は跡かたもなく消えている。

無理もない。あれから半世紀もの歳月が経ったのだ。おそらくこのあたりだったと思われる場所には二階建ての住宅が建っている。その家に昔の古い下宿屋のたたずまいを重ね合わせると、懐かしさでいっぱいになった。

あのへんに私の部屋の窓があったはずと二階を見上げると、何とその家にも同じ場所に窓がある。西陽の当たる窓辺はちよつとした物干し場になっており、ハンガーに吊るされた洗濯物が風に揺れている。私の目は、思わずその揺れるハンガーに釘づけになった。

あの夜、私は同じこの窓辺のハンガーに、洗ったばかりの白いブラウスを吊るして寝たのだった。どうしても朝迄に乾かしたかった。ところがその明け方、思いがけない春一番が吹き荒れた。そして、その風がブラウスをさらっていつてしまったのだ。まだ薄暗い街の中、ブラウスは一体どこまで飛んでいったのだろう。

激しく窓ガラスを叩く風の音で目をさました私は、ブラウスを干して寝たことを思い出し、あわてて窓をあけた。

ない！ブラウスがない。針金のハンガーだけが一本、ロープにからまって空しく揺れている。

私はあたふたと階段を駆け降り、寝間着姿のまま外へ飛び出すと、そこいら中を捜し回った。隣の居酒屋の背戸から駅前、地下の改札口に続く階段、国道脇の植え込みや街路樹の枝、必死で捜したがどこにもない。

明け方の街の中は、唸り声をあげて冷たい風が吹き荒れているばかり。私はひとり、途方にくれた。

「あたしのいちばん気に入ってるブラウスやねん」

数日前、先輩はそう言って、自分の部屋のタンスからそのブラウスを大切そうに出して私に貸してくれたのである。

ふつくらとした丸衿と、胸元に施された美しいピンクタック。背中のボタンは、その艶やかなシルクの生地的光沢に似て、やさしいパールの色をしていた。見たこともない綺麗なブラウスだった。先輩に借りたその一張羅に身を包んで、私は昨日、晴れがましく短大の卒業式に出席したのだった。

そもそも、クリーニング代を節約して、そんな大切な借り物を自分で洗ったのが間違いだった。悔やんだが、もう遅い。

高校を卒業した私は、故郷愛媛の山村から西宮市に出て、女子大学の事務局に就職した。そして、昼間の仕事を終わると夜は二部学生として、その短大部で学ぶ生活を始めた。規律が厳しく、制服での通学が義務づけられていたが、夜間学生に限り私服が許されていた。

だが、行事や式典には制服で出席しなければならぬ。私は二年間、とうとう制服の黒いスーツと白いブラウスを買うことができず、そのたびに無理を言っってはひとから借りていた。卒業式には職場の先輩が一式貸してくれたのだった。

その大事な借り物を、私はなくしてしまったのである。仕事で叱られることには慣れている。でも今日ばかりは辛い。

何と言って詫びようか。仕事場が近づくにつれて私の足取りはだんだん重くなり、例えようのない悲しみがこみ上げてきた。半分学生の身、安い給料の大半が学費に消えていく。ブラウス一枚買うことのできない自分の貧しさが、その時初めて悲しかった。

先輩は湯沸し室でお茶の準備をしていた。私に気付いた彼女は、振り返るとにっこりとして言った。

「きのうはおめでとう。どうやった？」

途端に私の目から、こらえていた涙がせきを切ったように溢れ出た。

「ブラウスが……」

そう言ったまま、あとの言葉が続かない。先輩は入口のドアをそっと閉めると、泣き泣き話す私の間拔けな失敗談にじっと耳を傾けていたが、聞き終えたと私の背中をやさしくたたいて言った。

「泣かんでもええ。ブラウスは春一番にあげたらええねん。明日からあったかくなるよ」  
その時の彼女の笑顔と、温かな言葉を私は生涯忘れない。

ふたとせ  
青春 一年。まさに嵐が駆け抜けるような日々であったが、最後に本当の嵐が吹き荒れた。そして私は、あの日の「春一番」に最高の卒業プレゼントをもらった。